

大阪市内における朝鮮・日本石造物 調査報告

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会



層塔 Stone Stupa

例 言

- 一、本書は大阪市建設局(当時)による毛馬桜之宮公園予定地内における石造にかかるとの文化財的調査の報告書である。
- 一、調査は平成2年度に行い、その後、一部の石造物は平成4年に花博記念公園鶴見緑地内に展示された。
- 一、調査にあたって、藤沢一夫氏(前国際仏教大学教授)・水野正好氏(当時奈良大学文化財学科教授)・井上秀雄氏(当時相愛大学教授)・朴鍾鳴氏(当時錦織文庫理事長)・郷早苗氏(当時桃山学院大学講師)・長山雅一氏(当時大阪市教育委員会文化財保護課主任学芸員)・永島輝臣氏(当時財団法人大阪市文化財協会調査課長)によって構成される指導委員会を設け、各委員から多大なご教示・ご指導を受けた。
- 一、調査は調査研究部長永島輝臣氏の指導のもと、藤沢典彦氏(大谷女子大学)・岡本広義氏(元興寺文化財研究所)・牧伸行氏(仏教大学文学部非常勤講師)・杉浦隆支氏(能登川町教育委員会)より多大なご協力を得て、大阪市教育委員会文化財保護課長代理植木久が行った。また、本書作成にあたって藤沢氏には多大なご教示を得た。
- 一、本書の1は藤沢典彦氏から玉稿を賜った。英文要旨ならびに目次の作成は、アメリカ合衆国ワシントン州立大学のMatthew W. Van Pelt氏が行った。本書の編集と作成は調査研究部研究副主幹田中清美・報告書作成室長松尾信裕が行った。
- 一、石造物撮影にあたっては花博記念公園整備事務所からご協力を得た。
- 一、石造物の写真撮影は徳永閑治氏に委託した。
- 一、調査と報告書作成の費用は大阪市建設局が負担した。
- 一、調査で得られた図面・写真などの資料は当協会が保管している。

本文目次

例言

1 石造物の調査結果	1
1) 朝鮮 (中国)	1
2) 日本	3
2 朝鮮製石造物の現状	4

英文目次・要旨

図版目次

1 石造物展示風景 上：層塔および石人・石羊展示風景 中：石燈籠・供物台展示風景 下：望柱石展示風景	5 層塔および石燈籠 上左：層塔11 下左：石燈籠14	上右：石燈籠12 下右：石燈籠13
2 石人 上左：石人1 下左：石人3	上右：石人2 下右：石人4	
3 石人・石羊および望柱石 上：石人、石羊、望柱石の展示風景 中：石羊7 下：石羊8	5 石燈籠 上左：石燈籠15 下右：石燈籠16	上右：15欄部 下右：16欄部
4 石羊および台石 上：石羊9 中：石羊10 下：台石31	7 石燈籠および望柱石 上左：石燈籠17 下左：望柱石20	上右：望柱石18 下右：望柱石22
	8 望柱石および供物台 上左：望柱石23 下左：望柱石25	上右：望柱石24 下右：供物台26
	9 供物台 上左：供物台27 下左：供物台29	上右：供物台28 下右：供物台30

挿図目次

図1 朝鮮製石造物(1)	7	図4 朝鮮製石造物(4)	10
図2 朝鮮製石造物(2)	8	図5 日本製石造物(1)	11
図3 朝鮮製石造物(3)	9	図6 日本製石造物(2)	12

表目次

表1 石造物計測表	6
-----------------	---

1 石造物の調査結果

1) 朝鮮(中国)

a. 石人(図1-1~4、図版2)

朝鮮半島で墓地の前に立てられる文人像である。墓地の前に文人武人その他動物等が立ち並び墓道(墓前広場)を形成するあり方は、中国の古代に遡るものであり、朝鮮半島でも統一新羅の掛陵や聖徳王・興徳王陵等の古代の王墓の中に見られるところである。その伝統が近世の李王朝にまで伝えられてきた。

李王朝歴代の墓は基本的には土饅頭形の墳丘墓であり、その周辺に石造品による器物等が配置されている。武人と文人は墳丘前方の左右に対称位置に並んでいるが、基本的には文人が墳丘に近く位置し、墓を守護する役割の武人が外側に位置する。これらの風習が民間にも広がった。現代の庶民墓もこの王墓の小型化・簡略化したものである。

本例の文人像は埋込み式に造られており、根から像まで一石彫成である。根の部分には全く装飾が無く、地面に直接立つ形でつくられている。胸前に笏を持ち、直立した姿である。

1・2の冠帽は3・4のものに比して退化が強く見受けられる。目の表現は輪郭内部分をふくらませるだけであり、瞳を造らない。前の衣文は腰から下が雲形に変形しており、背面にも同様な雲形が背中より下に配置されている。その点についてもやや時代的に降る傾向をみせている。李王朝でも後期のものであろう。

3・4は等身大よりやや大型である。衣文の表現が1・2の石人より写実的であり、また目の表現も丁寧に表現されており、やや古い傾向をみせている。李王朝中～後期に属するものである。

b. 石獅子(図1-5・6)

古いタイプの狻猊は、前足を力強く突っ張り、胸を大きく上方に反らせ、視線を前方上に向けている。それに比して本例は前足がほぼ垂直に立ち、頭の大きさのしめる割合が大きくずんぐりしている点、背筋のラインがいわゆる猫背になっている点など、時代的に降る事を示している。また、頭髪に流れる部分がなく、螺旋様に渦巻いている点も時代の新しさを示す。李王朝、それも後期の可能性が高い。胸前に大きな鈴をつける点はあまり日本の狻猊にみられない所で、大陸作であることを示す。中国製の可能性もある。

c. 石羊(図1-7~10、図版3-中・下、4-上・中)

墳墓の周囲を囲む形で、石虎等とともに墳墓におしりを向け、外向きに配置されるものである。

9・10は7・8の羊に対して直線的な表現でボリューム感に欠ける。膝の表現なども省略されており、かなり観念的な表現となっている。7・8よりは時代的に降る物であろうか。

d. 層塔(図2-11、巻頭・図版5-左上)

初層軸部は二石を組み合わせたもので、3層は一石より成る。2層のみ両端に柱を刻出する。二重基壇は切石を組み合わせて構成し、東石・羽目石等は省略されている。全体的に表現の退化が著しい。統一新羅の末から高麗にかけてものと考えられる。

e. 石燈籠(図2-12~17、図版5-右上・左下・右下~7-左上)

墳丘墓の正面中央に配置される物である。ここにみられる燈籠も墓前の燈籠と考えてよい。

12は笠部平面四角。火袋以下平面八角。火袋以下は各面素面である。

13の火袋の彫り方は火袋上面から彫り込むやり方をしている。本来、反対面に向けて側面から貫通させるのが普通だが、その簡略化させた手法である。李王朝後半のものであろう。

14は平面四角。各面とも素面で装飾はない。埋込み式。

15は平面四角。各面に蓮弁・格座間等の装飾が施されている。笠とそれ以下の二石からなる。根があって埋込み式。

16は平面四角。各面に蓮花・格座間等の装飾が施されている。笠とそれ以下の二石からなる。安置式である。

17は平面四角。竿部分に格座間、火袋部分に二重直線文様が施される。火袋は四面に窓がある。

f. 望柱石(図3-18~21・図4-22~25、図版7-右上~8-左下)

望柱石は墳丘墓の直前兩脇に配置される。柱を立てる台の付属する物とそうでない物がある。一応、台の付属する物の方が古い傾向があるようだ。文様には様々なものが見られるが、宝珠の部分は文様がなく、下に連珠文・宝相華文、その下に装飾文様が配置されるのが文様パターンである。

朝鮮半島には本来、木造の望柱があり、それに布製の垂飾が施されていた。それが石造品に代わった時点で文様化したものと考えられる。

18・19は柱本体は無装飾である。

20は珠文の部分が彫り込まれていない。基礎と別石で、基礎に差込み式になっている。基礎下は浅い根部分が付いており、一応、埋込み式である。図示していないが、対となる望柱石は宝珠の下部部分が宝相華・連珠文・垂飾になっている。

21は宝珠の下部部分が宝相華・連珠文・垂飾になっている。基礎と別石で、基礎に差込み式になっている。基礎下は平面方形の根部分が付いており、埋込み式である。

22は宝珠の下部部分が宝相華のみで、その他の装飾はない。八角の基礎を一石で造り出す。基礎の下部に根を直接造り出す。埋込み式である。

23は宝珠の下部部分が連珠文・宝相華・連珠文・垂飾になっている。基礎部分まで一石で造り出す。基礎部分の下に直接根が造り出され、埋込み式である。

24は宝珠の下部部分が宝相華・連珠文・垂飾になっている。基礎部分がなく、柱に直接根が造り出されている。埋込み式である。

25は宝珠の下部分が連珠文・宝相華・連珠文・垂飾になっている。基礎は一石で造られている。基礎と一体の根部分が付いており、埋込み式である。

g. 供物台(図4-26~30、図版8-右下~9)

幕前に配置されたものである。木製の卓の形を石にうつした物である。背面には彫刻が施されていないので、何かに添わせ背面が見えない形で配置されたであろう。

h. 台石(図4-31、図版4-下)

本来は上面の穴はあいていなかった。手水鉢に改造されたものである。本来の用途は不明。類例としては景福宮の交泰殿背後の峨嵋山石池の台座がある。[朝鮮總督府1930、『朝鮮古蹟図譜』十の4666]

2) 日本

a. 石龕仏(図5-32)

石龕の中に仏像が入った状況を表現している。一般には南北朝頃から出現するが、時代の降下とともに小型化していく。南北朝では高さ2m程度のものも見られ、軸部高だけでも0.7~0.8m程度のものも多く見られるが、戦国期になると0.5m以下となり戦国期末には0.3m程度のものが急激に増大する。畿内地域では屋根と軸部が別石造りになるのが普通である。本例は一石造りであり、珍しい遺品である。

b. 一石五輪塔(図5-33)

34の宝塔笠上に載せられていたが、宝塔とは別物である。地輪下に納を彫り出すが、それは宝塔と合わせる際の細工である。

c. 宝塔(図5-34)

基礎にかなり退化した三茎蓮が彫られている。近江地方のものかと考えられる。

d. 国東塔(図5-35・36)

35には塔身から蓮台までの大きな内列があり、また塔身肩部分から内列にむけての穴が貫通している。これは墓地の中心に造られる惣供養塔であり、同時に納骨塔として機能したものである。肩部の穴は納骨に際しての投入穴であり、塔身部・蓮台部の内列は納骨の為の空間である。このような納骨塔が造られるのは鎌倉時代後半から南北朝時代にかけてであり、本塔も南北朝時代の物と考えてよいだろう。

36の塔身部には以下の銘文がある。

「建武二二(四)年丁丑七月十三日／大願主阿闍梨頼弁 敬・白／□・□供養下立／□・□三所権現

／□・□塔一基」

本塔は大分県西国東郡真玉町浜の熊野神社にあったものと伝えられている。

e. 板碑形丁石(図6-37)

寺院あるいは神社等への参詣道に、残りの距離を示すために立てられた道標の一種。しかし単なる道標ではなく板碑の形をしている事から塔婆としての意味合いもあり、参詣の途次、それを拝して行くものであった。

本例には「梵字(バク)卅一丁」の表記がある。作柄から関西方面の物と考えられる。石材の中に紛れ込んでいた。

f. 六地藏石幢(図6-38・39)

38は国東地方に旧在した物と考えられる。平面六角の石幢で龕各面に六地藏が彫り込まれているが、一面の地藏のみ坐像であり、その下に坐像(向って右)と立像の、二体の供養者像と考えられるものが彫り込まれている。

39の龕部分は平面八角で各面に六地藏と男女の神像各一体が彫られている。

g. 燈籠(図6-40)

宝珠を欠く。代わりに相輪(花崗岩製)の下端部の欠けた物を載せる。特徴的なのは火袋が二石からなる点で、京都府宇治市の平等院鳳凰堂の前に立つ石燈籠とよく似た形式である。基礎部分も平等院のものに似せて造られている。本品作製の時に平等院例を参考している可能性がある。

(藤沢典彦)

2 朝鮮製石造物の現状

先に報告した石造物の内、明らかに朝鮮半島で作製されたものについては、現在、大阪市鶴見区にある花博記念公園鶴見緑地内に移設され、展示公開されている。

地下鉄鶴見緑地駅正面の公園入口からメタセコイヤの並木道を通り、公園の中央にある大池に向かって歩を進める。大池に迫り着いたところで右に折れ、中央口から大池に沿って散策すると、右手の広々とした芝生の広場を過ぎた途端、目の前に石燈籠群が現れる。

その場所は緑地公園内中央にある国際庭園の一角にある韓国庭園の南側にあたり、韓国庭園と道を隔てた、植込で囲まれた中に集められ展示されている。そこには石造物の解説板が置かれ、公開趣旨が述べられている。

石造物は植込によって大きく2群に区画された中にひっそりと佇んでいる。中央口から入って最初に目にするのは石燈籠と供物台を展示しているスペースである(図版1-中)。

今回報告した石燈籠が植込越しに頭を出しており、一目でそれとわかる。丈の高い燈籠は日差しに

照り返され白く輝き、その存在を主張している。

区画内の少し離れた所には供物台が配置されている。供物台は丈が低いため、囲い込む植込によって隠れてしまうものや、丁寧な彫刻が見えないものもあり、少々残念である。

この区画と望柱石の区画の間の散策路には台石が置かれている。台石に穿たれた穴には水が溜まり、時折飛来する小鳥の水浴びの場所となっている。

石燈籠群や供物台群の区画の北には望柱石を集めた区画が広がる。背の高い望柱石は樹木の梢にまで達しており、先端の宝珠部分が隠れるほどである(図版1-下)。

2基揃っている望柱石は1対となるように並んで配置されている。周囲の樹木の梢が頭上に生い茂っているせいで目立ちにくいのが、梢から射し込む木洩れ日に白く浮かび上がっている。

この西側には層塔を中心に石人2対と石羊2対が相対している。背後にある韓国庭園の門の正面に層塔を置き、その前に石人と石羊を配置させる。あたかも層塔を主人公のように前面両脇に並列させている。この一角は、層塔の背後にある韓国庭園の門を南側から植込越しに望めるように、樹木のない開放的な空間となっている(図版1-上)。

層塔は端正な姿で屹立し、前面に控える石人や石羊を従えている。2対の石人や石羊は寡黙な面持ちで主人である層塔を警護しているかのようである。ただ、手前に置かれた石羊は区画の植込に接近しすぎており、また、植込の高さと同じくらいの背丈しかなく、近づかないとその存在さえわからないかもしれない。層塔に向かって左側に立つ石人や石羊には背後の樹木の梢が覆い被さっており、葉が茂ってくる時期には、遠目からは見つけにくくならう。

こうした石造物の展示区画の周囲には長方形に加工された石材を組み合わせたものや、腰掛状の自然石を点在させ庭園風の空間を演出している。また、区画の間の通路には加工された石材を飛石状に置き、散策路を設けている。さらに、背後にある韓国庭園の門の正面に展示されていることで、韓国庭園へいざなう役割も果たしている。

日本国内でこうした朝鮮半島の石造物をまとまって鑑賞する機会は多くはなく、是非、多くの方々に鑑賞していただければと願う次第である。

(松尾信裕)

表1 石造物計測表

番号	名称	総高(cm)	礎高(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	国別	時代	備考
1	石人	145.0	105.0	35.5	30.0	朝鮮	李王朝	2と対
2	石人	137.0	104.0	35.0	31.0	朝鮮	李王朝	1と対
3	石人	210.0	188.0	54.0	40.0	朝鮮	李王朝	4と対
4	石人	212.0	185.0	51.0	47.5	朝鮮	李王朝	3と対
5	石獅子	102.2	77.0	51.0	54.0	朝鮮?		中国製の可能性もある。6と対
6	石獅子	104.0	80.0	47.0		朝鮮?		中国製の可能性もある。5と対
7	石半	94.0	70.0	44.0	112.0	朝鮮	李王朝	8と対
8	石半	92.0	73.0	42.8	118.0	朝鮮	李王朝	7と対
9	石半	96.0	74.0	40.0	124.0	朝鮮	李王朝	10と対
10	石半	93.5	70.0	40.0	124.0	朝鮮	李王朝	9と対
11	層塔	358.3		240.0	240.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	三層笠部	34.0		80.0	82.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	三層輪部	17.0		37.0	37.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	二層笠部	32.0		87.0	82.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	二層輪部	31.0		45.0	45.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	初層笠部	38.8		98.5	98.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	初層輪部	60.0		58.0	28.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	初層輪部	60.0		58.0	27.5	朝鮮	統一新羅~高麗	
	礎石	18.5		144.5	73.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	礎石	18.3		145.5	73.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	羽目石	69.0		99.0	21.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	33.0		132.0	41.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	33.0		134.0	42.5	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	33.0		134.0	41.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	21.0		100.0	70.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	21.5		100.0	71.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	20.5		100.0	70.5	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	26.5		123.0	40.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	26.5		121.0	41.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	25.5		122.5	40.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	25.0		121.0	40.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	24.0		88.0	40.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	24.0		85.0	39.5	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	25.0		88.0	39.5	朝鮮	統一新羅~高麗	
	基壇の部分	23.0		85.0	40.0	朝鮮	統一新羅~高麗	
12	石燈籠	145.2	145.2	65.0		朝鮮	李王朝	火袋幅36.5
13	石燈籠	172.0	124.0	63.5		朝鮮	李王朝	本体高は126.6。火袋幅は38.3
14	石燈籠	177.0	127.0	64.0		朝鮮	李王朝	基礎幅48
15	石燈籠	278.5	238.0	124.0		朝鮮	李王朝	基礎幅76
16	石燈籠	244.0	244.0	124.0		朝鮮	李王朝	基礎幅58
17	石燈籠	227.0	174.0	73.0		朝鮮	李王朝	基礎幅42.6
18	望柱石	253.0	216.0	71.0		朝鮮	李王朝	19と対
19	望柱石	254.5	218.5	72.0		朝鮮	李王朝	18と対
20	望柱石	233.0	215.0	61.0		朝鮮	李王朝	柱幅32
21	望柱石	301.0	267.0	65.0		朝鮮	李王朝	柱幅24.8
22	望柱石	176.0	160.0	36.0		朝鮮	李王朝	柱幅25.5
23	望柱石	210.0	180.0	39.0		朝鮮	李王朝	柱幅25
24	望柱石	234.0	188.0	43.0		朝鮮	李王朝	柱幅39.3
25	望柱石	230.0	183.0	47.5		朝鮮	李王朝	柱幅43.5
26	供物台	69.0	64.0	39.0		朝鮮	李王朝	28と対
27	供物台	67.5	64.0	41.0		朝鮮	李王朝	
28	供物台	65.0	55.0	37.0		朝鮮	李王朝	26と対
29	供物台	86.5	52.5	42.0	31.0	朝鮮	李王朝	
30	供物台	67.0	44.0	40.2	30.0	朝鮮	李王朝	
31	台石	49.0		96.0	61.0	朝鮮	李王朝	
32	石籠弘	51.0	25.0	31.0		日本	室町	
33	一石五輪塔	61.0	55.0	20.0		日本	室町	
34	宝塔	157.5	157.5	80.0		日本	鎌倉	塔身径53.8。笠幅67
35	国東塔	245.0	216.0	88.0		日本	南北朝	塔身径66.2
36	国東塔	253.0	230.0	84.0		日本	南北朝	塔身径61.5
37	板碑形丁石	130.0	98.5	23.5	19.5	日本	室町	
38	六地蔵石闌	303.0	303.0	104.0		日本	室町	
39	六地蔵石闌	203.0	203.0	93.0		日本	室町	宝珠欠
40	石燈籠	198.0	198.0	76.0		日本	江戸	

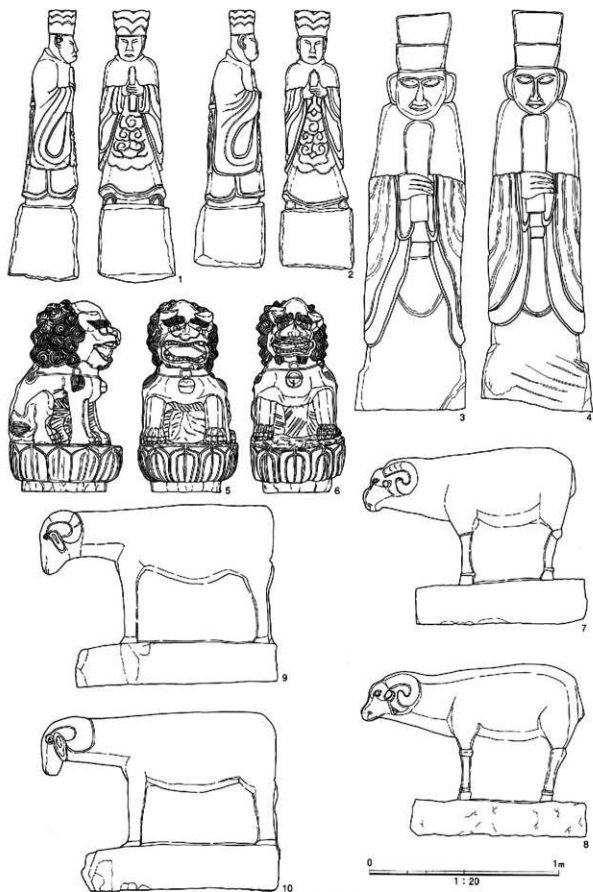


图1 朝鲜製石造物(1)

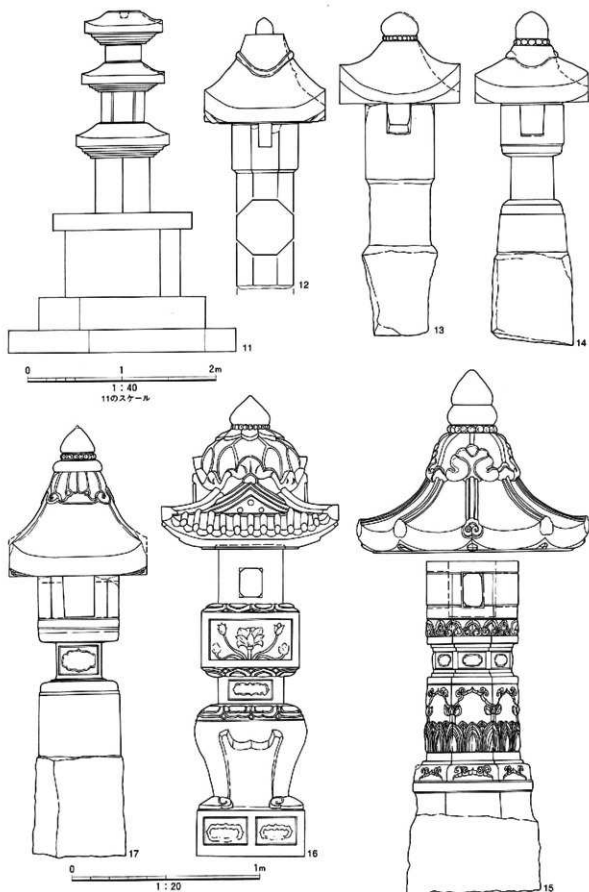


図2 朝鮮製石造物(2)

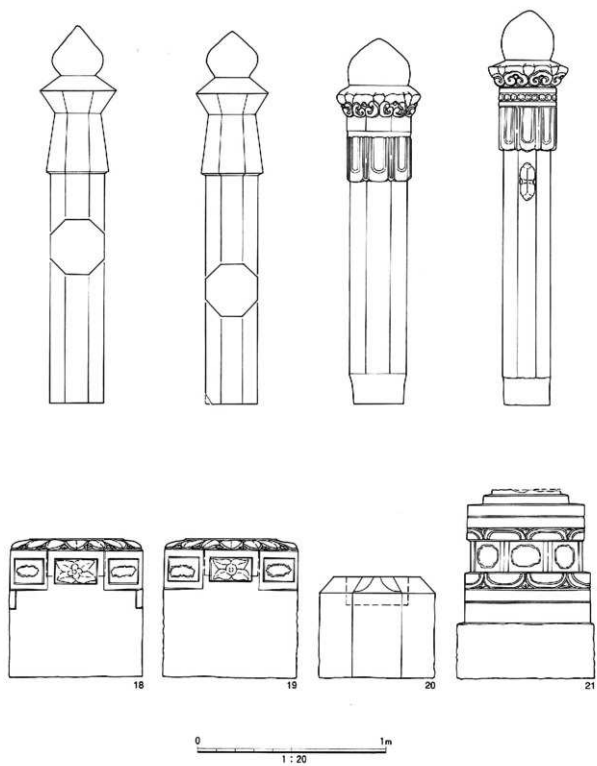


图3 朝鲜製石造物(3)

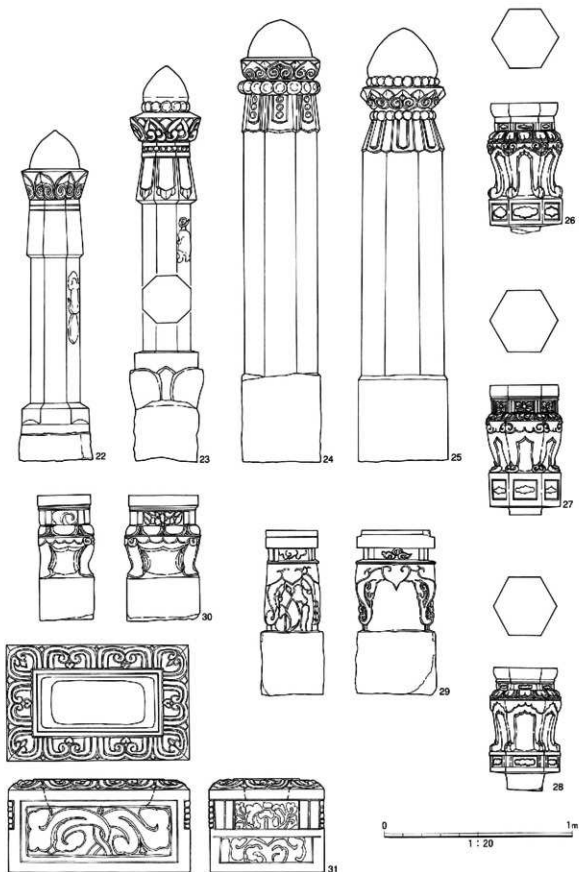


图4 朝鲜製石造物(4)

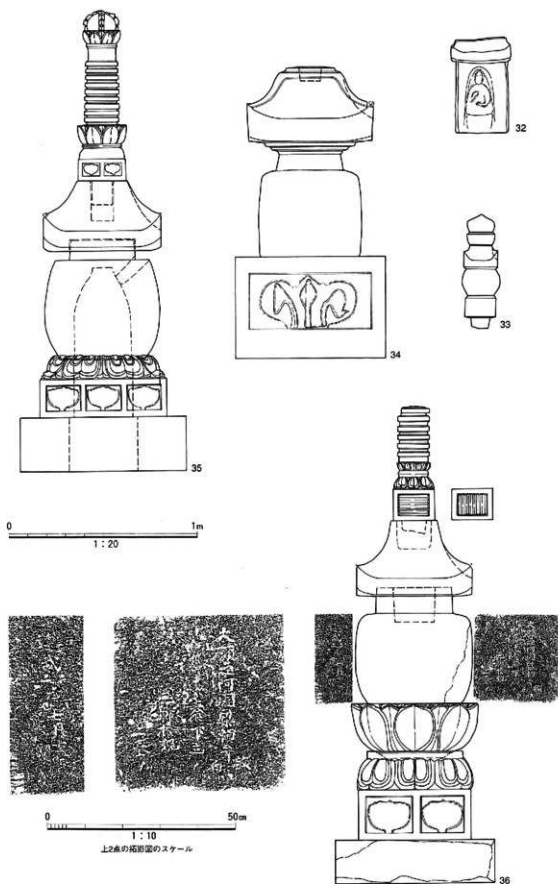


図5 日本製石造物(1)

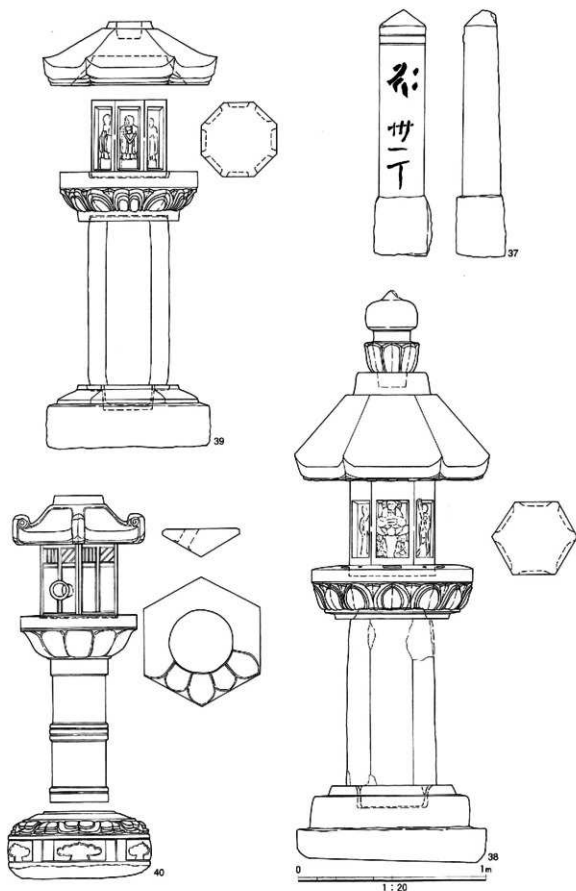


図6 日本製石造物(2)

A Study of Korean and Japanese Carved Stone Objects in Osaka

CONTENTS

Acknowledgements

Chapter 1 Carved Stone Objects Investigation Results	1
1) Korean Peninsula and China	1
2) Japan	3
Chapter 2 Current Status of the Stone Objects	4
English Summary	

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

ENGLISH SUMMARY

The carved stone objects reported here include those produced both domestically and found on the Korean Peninsula. Some are from the Chosun dynasty and some stupa that date back to Unified Silla or Koryo Dynasty.

The multi-storied stone stupa, which is at least a 3 story stupa 3.6 meters in height and is missing its top, dates back to the Unified Silla or Koryo times. The design originates from similar structures within the precincts of a temple.

The stone figures were originally in pairs in front of a mounded tomb. These figures are from the Middle Chosun Dynasty.

The pair of stone sheep was also associated with a mounded tomb. By closely examining the details of the carving it can be seen that there is a difference in the style and some standard elements are missing. These indicate that the sculptures are from after the Middle Chosun dynastic period.

In addition, there were a number of stone lanterns ranging in size from 1m to 2.5m in height that were arranged in front of mounded tombs as well. Further, there was abundant variety in the design patterns of the lanterns ranging from simple patterns on the smaller lanterns and more intricate patterns on the larger ones. All of the lanterns are from the Chosun Dynasty.

The large stone pillars were inserted directly in the ground on both sides of the front of a mounded tomb. The pillars embedded directly into the ground tend to be older than those supported by a foundation stone. The pillars bear decoration at the top. All of these pillars are associated with the Chosun Dynasty.

Stone pedestals were placed in front of the tombs over which were placed wooden tables on which offerings were placed for the individuals buried in the tomb. There is no decoration on the rear of the offertory tables and it appears as though they were designed to be connected to an additional object. All of these are associated with the Chosun Dynasty.

A stone pedestal with a cavity in the upper surface appears to have been one of the above described pedestals remolded into its present condition of a hand cleansing trough. Near the base of Mt. Emei (峨眉山) at the rear of the Kyotae Hall (交泰殿) at Kyung Bok Palace (景福宮) in Seoul, South Korea, there is a stone basin similar to this. It is known to be associated with the Chosun Dynasty.

Among the items from Japan include a 5-part stone columnar tombstone, a miniature stupa used as a sutra case, a two-storied stupa, a Kunisaki style stupa, a pilgrimage signpost block, six-sided stone devotional image columns, stone memorial towers, and a number of stone garden lanterns.

The miniature sutra-case stupa did not have a basal pedestal. As a result of this feature it has been suggested that this particular stupa was made in somewhere in Shiga Prefecture. It dates to the Kamakura Period. The five-part stone columnar tombstone was not atop a stupa or a platform. It is from the Muromachi Period.

A bone was found near the base of a Kunisaki style stupa, the stupa being inscribed with a date corresponding to A.D. 1337 (Kenmu 4). This Kunisaki style stupa bears the

characteristic markings of stone stupas found in Oita-ken on the Kunisaki Peninsula. This is an excellent example of this type of stone stupa dating to the Nanbokuchou Stage of the early Muromachi Period.

The pilgrimage signpost block was intended as a marker for pilgrimages to shrines and temples. This example has the shape of a stele and a grave tablet was included in the carving. This item was associated with temple worship.

Judging from the surface treatments on the six-sided stone devotional image columns, they were probably carved in Oita Prefecture on the Kunisaki Peninsula. They date to the Muromachi Period.

The garden lanterns date to the Edo Period and are apparently reproductions of similar style to those found at Byoudoin in Kyoto.

版 図



層塔および石人・石羊
展示風景
Stone Stupa,
Stone Figures
and Stone Sheep



石燈籠・供物台
展示風景
Group of Stone
Lanterns and
Stone Platforms



望柱石展示風景
Group of Stone
Columns



石人 1 Stone Figure No. 1



石人 2 Stone Figure No. 2



石人 3 Stone Figure No. 3



石人 4 Stone Figure No. 4



石人、石羊、望柱石
の展示風景
Stone Figures,
Columns, and
Sheep



石羊 7
Stone Sheep No. 7



石羊 8
Stone Sheep No. 8

石羊9
Stone Sheep No.9



石羊10
Stone Sheep No.10



台石31
Re-carved Stone
Pedestal
(Pedestal No.31)





層塔11 Stone Stupa No.11



石燈籠12 Stone Lantern No.12



石燈籠14 Stone Lantern No.14



石燈籠13 Stone Lantern No.13



石燈籠15 Stone Lantern No.15



15細部 Stone Lantern No.15 Top Detail



石燈籠16 Stone Lantern No.16



16細部 Stone Lantern No.16 Top Detail



石燈籠17 Stone Lantern No.17



望柱石18 Stone Column No.18



望柱石20 Stone Column No.20



望柱石22 Stone Column No.22



望柱石23 Stone Column No.23



望柱石24 Stone Column No.24



望柱石25 Stone Column No.25



供物台26 Stone Pedestal No.26



供物台27 Stone Pedestal No.27



供物台28 Stone Pedestal No.28



供物台29 Stone Pedestal No.29



供物台30 Stone Pedestal No.30

大阪市内における朝鮮・日本石造物調査報告

ISBN 4 - 900687 - 55 - 3

2002年3月29日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

**A Study of Korean and Japanese
Carved Stone Objects in Osaka**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association